関西生コン弾圧事件ニュース NO.118　2025年3月25日

＜本号４ページ＞

●本号の内容

１　鎌田慧さんコラム／MBS「労組と弾圧」上映スケジュール・・・・・・・・・・・・・p1
２　「労組と弾圧」紹介記事（相澤冬樹氏、文春オンライン掲載）・・・・・・・・・p2

21　特報　11版　2025年（令和７年）3月25日（火曜日）　東

本音のコラム

労働争議は犯罪か

鎌田 慧（かまた さとし）

春闘は季語だった。春になると、街角に赤旗が立った。今は団交ですんなり金額が決まるだけ。ストライキをせよというわけではないが、ストライキを「伝家の宝刀」として神棚に飾っておくと、次第に錆びついてしまう。

関西生コン支部は「全日本建設運輸連帯労組」に加盟している、ミキサー車運転手などの労組だが、この組合に対し、滋賀、京都、大阪、和歌山の警察、検察、裁判所はストライキやビラ撒きなどの活動を労働運動として見ていなかった。反社会組織に見立て、威力業務妨害や強要未遂、恐喝の罪で訴追してきた。

2018年以降、81人の労組員が逮捕され、66人が起訴された。前委員長は逮捕6回、641日勾留、現委員長は8回逮捕、644日の長期勾留。挙げ句の果てに懲役10年の求刑だった。まるでどこか強権国家の政治弾圧のようだ。

この組合は産業別労組。個人加盟方式で、日本で一般的な企業別組合ではない。企業内に組合員が1人いるだけでも、団交の時には本部からの役員が交渉に加わる。

ところが、検事や裁判官は不勉強だった。検事が保釈を条件に脱退を唆したり、司法が団結権侵害に踏み込んでいた。京都地裁での幹部の無罪判決は本紙でも報道された（2月28日など）。労働運動など社会運動への弾圧は戦争へまっしぐらだ。（ルポライター）

2025.3.25

＊＊

映画館にお出かけください

MBS『労組と弾圧』（75分版）、上映日程決まる

TBS ドキュメンタリー映画祭 2025 の出品作品『労組と弾圧』の上映スケジュールが以下のとおり決まった。TV 放映版を増補した 75 分バージョンなので、ぜひ映画館にお出かけください。

３月２８日（金）１４：００～　テアトル梅田
　　舞台挨拶あり（伊佐治整ディレクター／内田樹（哲学者））
　同　　１４：００～　アップリンク京都
　３１日（月）１２：３０～　アップリンク京都
４月　２日（水）１８：３０～　ヒューマントラストシネマ渋谷
　５日（土）１２：１５～　アップリンク京都
　　舞台挨拶あり（伊佐治整ディレクター／望月衣塑子（東京新聞記者））
　６日（日）１２：１５～　テアトル梅田
　９日（水）１２：１５～　テアトル梅田

【お詫び】TBS ドキュメンタリー映画祭で「労組と弾圧」は、上記以外の名古屋、札幌、福岡でも上映と先にお伝えしましたが、残念ながら名古屋などでの上映はないようです。

発行：全日建（全日本建設運輸連帯労働組合）　お問い合わせ０３－５８３０－６４１８

《関西生コン事件》「ストライキが犯罪なんて…」大手マスコミがほとんど報じなかった「捜査に名を借りた組合潰し」の実態《映画『労組と弾圧』》

＊文春オンラインが上記タイトルの記事を３月２５日付で掲載した。本文は以下。
筆者は森友学園事件を追及した元 NHK のジャーナリスト、相澤冬樹氏。

2018 年以降、ミキサー運転手の労働組合「連帯労組関西地区生コン支部」の組合員が次々と逮捕された、「関西生コン事件」。ネットで真偽不明の情報が飛び交う一方で、起訴された被告には無罪判決も相次ぐ。メディアがほとんど報じてこなかった戦後最大規模の「労働事件」の真相に迫った本作は、ギャラクシー賞に入選したテレビドキュメンタリーの劇場版だ。

◆◆◆

「関生（かんなま）って労働組合って思います？ 我々は労働組合とは思っておりません」

この言葉が映画の主題を象徴する。関生=連帯労組関西地区生コン支部について、労組ではなく“反社”だと公言する生コン会社の経営者たち。だが、その“反社会的”イメージは経営側が警察権力とともに労組を“弾圧”する過程で作り上げたものではないのか？　映画は、捜査に名を借りた組合潰しの実態に迫っていく。

かつては経営側団体と共闘していた時期もあった

関生は、生コンを運ぶミキサー車の運転手らで作る労働組合だ。同じ職種の労働者が職場の枠を超えて団結し労使交渉にあたる「産業別労働組合」。企業ごとの労組が多い日本では珍しい。その背景には生コン業界に固有の事情があることが描かれる。

生コンは出荷から 90 分で固まってしまう。こまめにミキサー車で出荷する必要があり、大量生産に向かないから生コン業者は中小企業が多い。これに対し原料のセメントメーカーや発注者のゼネコンは大手中心だから、言いなりの取引条件を押し付けられることが多かった。そこで働くミキサー運転手は「練り屋」と呼ばれ、さらに立場が弱かった。

これを打破しようと 1965 年に結成されたのが関生で、生コン業者の背後にいる大手企業の支配構造との闘いを掲げ、賃上げや正社員化を求めて激しく交渉を重ねた。経営側の団体「大阪広域生コン協同組合」が結成された際は、関生との共闘で業界全体の利益を確保し、賃上げも行うという約束が交わされたという。

逮捕者81人、戦後最大規模の労働事件に

ところが共闘は長続きしなかった。2017 年、関生は約束通りの賃上げを求め全面ストライキに突入。セメント会社の前でトラックを止め運転手に出荷停止への協力を求めた。会社側の人物が労組員とのもみ合いの中で声を上げる。

「我々普通の業務をしたいだけなのに、妨害を誰かがしているからそれができない。誰なんでしょうか。皆さん（労組員）が立っているからですよね。どう考えてもおかしいですよね」

これは一体誰に向かってしゃべっているのだろう? 組合員に向かってなら「妨害を誰かがしている」という言い方はしないだろう。まるで、その場にいない第三者に向かって自らの正当性を主張しているように聞こえる。

経営側の団体は「連帯労組（=関生）を完全に排除するまで闘う」と宣言。ストに参加した組合員らを刑事告発・告訴した。これ以降、滋賀・京都・大阪・和歌山の各警察が相次いで関生組合員を様々な容疑で逮捕。中には、子どもを保育園に通わせるのに必要な就労証明書を職場に求めたのが“強要未遂”だとされたケースもあった。逮捕者は当時の武建一委員長をはじめ 81 人に上り、戦後最大規模の労働事件となった。

右翼団体「我々は業務委託として給料をもらっている」

攻撃は他でも始まった。右翼活動家で「ネット右翼の生みの親」とも称される瀬戸弘幸氏が大阪で関生を批判する街宣活動に乗り出した。その様子を動画で拡散し、「関生は暴力集団」というイメージが全国に広がった。だが瀬戸氏の本拠は福島市にある。なぜ急に大阪で関生批判を始めたのか? 取材陣が訪れると瀬戸氏は「右翼として関生を許せなかった」と主張しながらも、きっかけは別にあることを打ち明けた。

「大阪広域（生コン経営側の団体）の木村（貴洋）理事長から直接電話があって。『武建一という男に今いじめられているから何とか助けてください』と」

さらに、こんな裏事情も明かした。

「私は 70 万、毎月もらいました」

これに取材陣が突っ込む。

「右翼活動って国士じゃないですか。それにお金を対価としてもらうっていうのは」

すると瀬戸氏は、

「あなた方、仕事して金もらってるでしょ。我々も給料としてもらってるんです。業務委託として」

経営者が労組との団体交渉を拒むのは違法

実際、経営側団体の木村理事長や地神秀治副理事長が瀬戸氏の街宣現場にいる姿がカメラに捉えられている。取材を申し込んでも応じなかったため、取材陣は新年互例会に出席したところを直撃した。

「どうして瀬戸さんにお金まで出されたんですか?」

「もうやめろ」

カメラのレンズをふさぐ木村理事長。それでも取材陣はあきらめない。地神副理事長が会場から出てきたところでぶら下がった。すると、

「彼ら（関生）は我々が圧力をかけてるとかいろいろ言うけど、誰とお付き合いする、しないというのは我々も選ぶ権利があると思うんですよ。それでお付き合いしたくないという結論に至ったので、何も問題ない」

個人的な関係ならいざ知らず、経営者が労組との団体交渉を拒むのは不当労働行為として労働組合法で禁止されている。食い下がる取材陣に対し、記事冒頭の「関生は労働組合とは思わない」という本音が飛び出る。“反社”扱いしているが、自分たちが右翼団体に依頼したことはどうなるのだろう？　こうした経営側や右翼団体への直撃取材は、皆さんにおススメしたい映画の見どころの一つだ。

ストライキが犯罪なんて戦前に逆戻り?

一連の関生事件で無実を訴えた組合員 31 人のうち、無罪が確定したのは 10 人に上る。異常ともいえる無罪率の高さは、捜査が“無理筋”だったことを窺わせる。だが個々の組合員には計り知れない打撃を与えた。取り調べで保釈と引き換えに労組をやめるよう迫られることも多く、関生の組合員は 10 分の 1 に激減した。セクハラを解決してもらった縁で関生に入ったという女性組合員の話は、胸に迫るものがある。

「みんなが（釈放されて）出てくるまでは踏ん張ろうと言ってたんですけど、誰も聞いてくれなかったし。みんな自分のことしか考えてへんし、連帯（=関生）と一緒に沈みたくないって言われたこともあって、辛かったなあ」

大阪で取材していると、関生への共感の広がりも感じる。例えば大阪・豊中市の木村真市議は森友事件の追及で知られるが、関生への捜査についても早くから不当だと訴えていた。京都地裁で今年 2 月に言い渡された無罪判決の意義はとりわけ大きいという。

「関生の行動が労組の正当な活動として判決で認められました。それを刑事事件にした方が異常じゃないですか。ストライキが犯罪なんて、戦前に逆戻りしたみたいです」（木村市議）

働く者の自由と権利が奪われないために

この作品は、大阪の毎日放送（MBS）のドキュメンタリー番組を大幅に再編集して映画に仕上げたものだ。監督の伊佐治整ディレクターは、関生事件を「扱いが難しい割に関心が低いネタ」として多くのマスコミが敬遠してきたことへの自戒を込めたという。

「裁判を傍聴していると、組合を“削る”という言葉が検察から出てくるし、労働法をよく知らない裁判官もいることがわかります。関生は“反社”扱いされましたけど、実は労組としてやるべきことをやっただけではないでしょうか? 労組が犯罪集団とされる危うさをもっと報じるべきだと考えました」（伊佐治監督）

ナレーションは MBS の有名アナウンサー西靖さん。ラストコメントが光る。

「目をそらしてはならない。働く者の自由と権利がこの手から奪われないために」